

国際ロータリー
第2660地区

ガバナー

新谷 秀一



今月は職業奉仕月間であり、また米山月間でもあります。

本稿を書いている最中にも、またしても食品業界を舞台に残念な偽装が発覚し、新聞の紙面を賑わしています。北海道での限定販売などマーケティング戦略に優れた有名菓子会社の社長のモラルが問われる事件であります。

職業奉仕に関連してロータリー綱領は、「事業および専門職務の道徳的水準を高めること、あらゆる有用な業務は尊重すべきであるであるという認識を深めること、そしてロータリアン各自が業務を通じて社会に奉仕するためにその業務を品位あらしめること」の一節があります。まさしく綱領のとおり自分の事業において道徳水準を高め、社会に貢献することこそが職業奉仕であります。「三方よし」とは江戸時代中期より近江商人の活動理念を表す代表的な言葉で「売り手よし、買い手よし、世間よし」の精神として知られています。これらは共に符合する思想であり、時代を問わず普遍の真理であると思います。

自己の職業と関わる全ての人と、互いに人間関係を尊重することが職業の繁栄につながることを自覚し、相互に感謝と信頼の心がかよいあうよう心がけるべきだと思います。

次に米山記念奨学会についてですが、米山奨学事業は日本最初のロータリークラブの創立に貢献した米山梅吉氏の功績を記念して1952年に東京ロータリークラブが構想を立てられた事業が、

日本全クラブの共同事業に発展し、1967年文部省(文部科学省)の許可を得て財団法人ロータリー米山記念奨学会となりました。米山奨学事業は日本のロータリアンが作り育てた国際奉仕プログラムです。財団法人化以前の1958年以来半世紀にわたって、日本の大学・大学院で学ぶ外国人留学生を支援し、その数は13,902人(2007年4月現在)となりました。奨学金原資であるロータリアンの寄付金も飛躍的に増加し、年間800~1,000人を支援し民間第1位の規模を維持しています。また特筆すべきは、奨学生の採用基準が学業・人物両面の「優秀性」に主眼が置かれた結果、奨学生の85%が修士・博士課程となっています。13,000人を超える米山学友のうち博士号取得者は3,000人に近くなりますが奨学期間終了後はその多くが散逸し、ロータリーとは「音信不通」となってしまう現状は惜しむべき状況であり、これら学友のネットワーク化が重要な課題であります。そして、人口減少に向かう日本では、外国人労働者受け入れの議論が進む中、米山奨学生のように優秀性の高い人材を就職支援することも、学友のネットワーク化の強化とともに彼らの能力を社会に還元することに貢献できるのではないかという議論が進められつつあります。

(07年5月 米山奨学生・学友の就職支援に関する調査結果レポートより)

当地区としてもこれらの問題に取り組み、大いに議論すべき課題と考えています。